

# 小学校教員を目指す学生の英語に関する意識と今後の課題 —外国語活動を担当するにあたって—

木原 美樹子

## Future Elementary School Teachers' Awareness of Foreign Language Activities and Issues in the Future

Minako Kihara

(2016年11月25日受理)

### 1. 研究の背景と目的

2008(平成20)年改訂の学習指導要領により、2011(平成23)年度から「外国語活動」が小学校高学年で必修化された。外国語活動の指導者について、学習指導要領では以下のように述べられている。

指導計画の作成や授業の実施については、学級担任の教師又は外国語活動を担当する教師が行うこととし、授業の実施にあたっては、ネイティブ・スピーカーの活用に努めるとともに、地域の実態に応じて、外国語に堪能な地域の人々の協力を得るなど、指導体制を充実すること。

(『学習指導要領解説 外国語活動編』

「3 指導計画の作成と内容の取扱い」-(5))

前学習指導要領下の「総合的な学習の時間」における「英語活動」では「外国語指導助手」(以下ALT)を中心に授業が行われることが多かった。この改訂により「外国語活動」は「学級担任」を中心に行うことが示された。2014(平成26)年度に行われた「小学校外国語活動実施状況調査」(文部科学省)によれば、主に外国語活動を指導している者として「学級担任」が73.5%と報告されている。学級担任以外では、「外国語活動を専門に指導する小学校教員(専科指導教員)」が5.1%、「中学校や高等学校の英語教員」が0.9%である。「その他」が17.4%となっているが、これは主にALTではないかと推察される。学級担任がALTとティーム・ティーチング(以下TT)で行う授業の割合が増えてきており、学習指導要領で示された「ネイティブ・スピーカーの活用」が進んでいる。しかし

学級担任が英語力に自信がないこと等により、効果的なTTとは言えない授業例も報告されている<sup>[1]</sup>。英語力に自信がないため、授業がALT任せになる現状もあるようである。同調査では小学校教員の外国語活動に対する意識として、「自信を持って指導している」については「そう思う」と「まあそう思う」の回答が34.6%、「英語が苦手である」については67.3%であった。さらに今後の課題として小学校教員の51.7%が「教員の指導力」を挙げている<sup>[2]</sup>。これらの課題を改善するためには、教員の英語力を高めることが必要であると思われる。

2020(平成32)年度から小学校高学年で英語が教科となり、小学校中学年で外国語活動が行われることが決定している。小学校教員養成に関わる大学においては、それらの指導ができる人材の養成が急務である。小学校教員を目指す学生は、「外国語活動の授業は学級担任中心で行う」という意識を持ち、大学在学中に外国語活動、さらには必修化される「外国語(英語)」を担当できる力を身につける必要がある。

小学校教員を志望する学生を対象としたアンケート調査は、小学校教員や保護者を対象としたアンケート調査に比べると、規模も小さく、数もまだそう多くはない。田中ら(2013)や名畑目(2014)は、学生へのアンケート調査から望ましい教員養成のあり方を探る研究であるが、前者は外語大における調査である点で特殊である。外語大の児童英語教員養成課程の学生は、履修要件に英検2級かTOEIC 550点以上が課され、修了要件に英検準1級かTOEIC 730点が課されるほどの英語力を持っており、基本的に英語が好きな、得意な学生である。今回アンケート調査の対象とした教育学部の学生とは、性質が大きく異なると思われる。教育学部で初等教育を専攻し、

別刷請求先：木原美樹子，中村学園大学教育学部，〒814-0198，福岡市城南区別府5-7-1

E-mail：kihara@nakamura-u.ac.jp

[1] 町田(2015)参照。

[2] 他にも「教材・教具等の開発や準備の時間」48.7%、「外国語活動に関する教員研修」30.4%、「ALT等の外部協力者との打ち合わせの時間」29.7%等の回答がある。

小学校教員を目指す学生の中に、英語を得意とする学生はそう多くはない。名畑目(2014)は本研究と同様、初等教育を専攻する大学1年生を対象としたアンケートに基づく研究である。英語活動(外国語活動)に関する学生の意識調査を行い、学生の英語力の把握に、熟達度テストを行うことで英検3級から準2級程度と推察するなどした点も優れている。しかし、アンケート協力者の数が40名と少ない。また、本研究に取り入れた、学生たちの小学校以前の英語学習、海外経験を含めたこれまでの英語との関わり、英語そのものや異文化に関する意識についてはあまり考慮されていない。

本稿では、教育学部に在籍し、小学校教員を目指す学生が、将来外国語活動を担当する際に影響すると思われる、英語や異文化に関する意識を中心にアンケート調査を行った。大学の教職課程における学生の指導を考える上で、学生たちがこれまでどのように英語と関わり、英語や異文化に関してどのような意識を持っているのかを知ることは重要であると思われる。その結果と考察を、今後の指導にも役立てたいと考える。

## 2. 調査方法

2016(平成28)年7月に、教育学部1年次に在籍する大学生にアンケート調査を行った。ここで考察の対象とするデータは、その中でも明確に小学校教員になりたいと回答した学生100名のものである。この学生たちが小学生当時、どのような英語教育が行われていたのか。公立小学校では2002(平成14)年度から「総合的な学習の時間」の中で「英語活動」が行われるようになり、2007(平成19)年には97%の小学校で年10回程度の英語活動が実施されていた。2011(平成23)年度から小学校高学年において年間35時間の外国語活動が必修となり、文部科学省作成の『英語ノート』やデジタル教材を用いた指導が行われるようになった。対象学生は学習指導要領全面实施に向けた移行期の2009(平成21)年度に小学校第6学年に在籍していた学生が大半である<sup>[3]</sup>。

アンケート回答者は、選択必修の英語教養科目の受講者であり、かつ小学校教員を志している学生である。当該授業では、テキストとして、小学校や幼稚園での英語教育場面で使える実践的な英語力育成を目指したESP(English for Specific Purpose)教材を使用した。そして2年次後期に開講される、小学校英語の教授法に関わる授業につながるよう配慮した。平成27年度からこの英語

教養科目の履修者にはTOEIC IP試験の受験を課している<sup>[4]</sup>。TOEIC IP試験の受験は、英語力向上のために導入したもので、単位取得のために各英語科目を履修するだけでなく、継続的に英語の学習を続けてほしいと考えてのことである<sup>[5]</sup>。ESP教材を使ったこの授業により、学生は外国語活動における授業場面や小学校教員の役割についてのイメージをある程度持つことができ、卒業までに英語力を高める必要性を感じたようである。

アンケートは、Ⅰ. 早期英語教育に関する経験と意識、Ⅱ. 中学生から現在(大学1年前期)までの英語や異文化に関する経験と意識、Ⅲ. 外国語活動に関する意識について尋ねる項目からなる。Ⅲには、名畑目(2014)から3項目を取り入れた。各項目では、程度を尋ねるものについては5段階(1:全くそう思わない、2:そう思わない、3:どちらとも言えない、4:そう思う、5:とてもそう思う)で該当する番号を選択するようにし、具体的な経験、考えや理由の記述が必要な箇所では、自由記述欄に記入する形をとった。

## 3. 結果と考察

アンケートに回答した105名のうち、小学校教員になる意志が明確な学生100名の回答を集計した。Ⅰではまず、小学校以前の英語学習について質問した。小学生の時に英語の授業が「あった」と回答した学生がほとんどであった<sup>[6]</sup>。小学生の時やそれ以前に、学校以外で英語の学習経験があった学生は38名であり、それほど多くない。どのように英語を学習したか(複数選択可)については、英会話教室が17名で、幼稚園や保育園での英語教室、学習塾、家庭で英語教材を使って、がそれぞれ10名程度であった。

中学校入学前の早期英語教育の必要性に関しては、「そう思う」「とてもそう思う」と回答した学生は76名であった。理由としては「言語習得にはできるだけ早くから取り組んだ方が身につけやすい/苦手意識を持たずに済む」「スムーズに中学の英語学習に入れる」等が多く見られた。「自分が中学校の最初の英語の授業でつまづいたため」「中学入学前に勉強したことが役に立っている」等、自分の経験による理由を回答した学生もいた。逆に「全くそう思わない」「そう思わない」と答えた学生11名の半数は、理由として「国語(日本語)を優先すべきである」を挙げていた。教職課程において学生たちは授業実践・方法ばかりに目が行きがちであるが、第2言語習得

[3] 中学校第1学年に在籍していた学生も含まれる。

[4] TOEIC IP試験の受験は、1年次開講の英語の選択必修科目と2年次開講の英語の免許必修科目に課している。4つの科目を全て履修すれば、2年間で4回のTOEIC IP試験を受験することになる。

[5] 学生の取り組みに個人差はあるが、英語学習の意識付けとして導入した効果はあったと思われる。

[6] 3名が「なかった」と答えたのは、全面实施前であったためではないと思われる。

表1 「英語が得意ですか」

苦手である	やや苦手である	どちらとも言えない	やや得意である	得意である
38名	24名	23名	14名	1名

に関する基礎的な知識も、授業の中で取り上げ考察する必要がある。

Ⅱでは、中学生から現在までの英語や異文化に関する経験と意識について尋ねた。学生がこれまでに受験した英語の資格試験については、「受けたことがある」と答えた64名のうち58名は実用英語技能検定（英検）で、2級取得者が5名、準2級が22名、3級が20名、4・5級が6名であった<sup>[7]</sup>。福岡県の小学校教員採用試験は、2017（平成29）年度採用分から変更され、第二次試験の「英会話実技」の内容が「＜簡単な日常会話程度＞から＜英検2級程度＞に変更」（福岡県公立学校教員採用候補者選考試験実施要項）となった。また、実用英語技能検定2級合格者やTOEIC 550点以上取得者は、「英会話実技」試験の免除対象になるとのことである<sup>[8]</sup>。教育委員会から小学校教員として必要とされる英語力の指針が示されたことにより、学生たちの英語力向上への意識は高まっており、資格取得を目指す学生が増えてきている。大学として、学内で実施される資格試験の受験を勧めており、大学在学中でできれば採用試験出願時まで、上記の資格を取得するよう指導しているところである。

次に、これまでの海外経験（今年度の渡航予定を含む）を尋ねた。海外に行ったことがある、今年度の海外渡航が決まっている学生が計30名おり、行き先が英語圏（シンガポールを含む）の学生が25名であった。修学旅行で東南アジアに行った学生が一番多く見られ、シンガポール・マレーシアの4日間程度の経験が一番多かった。目的は他にホームステイ、研修、家族旅行と様々であり、期間は1週間から2週間程度が16名いた。小学校での外国語活動において、異文化理解は大きな柱である。指導者に海外経験があることは大きな強みとなると考えられる。これまで海外を経験した学生は、3割にも満たない。大学生の間には是非経験してほしいものである。これについては、「g. 海外に語学研修やホームステイに行きたい」と「h. 海外留学がしたい」の結果（表2）と合わせて後述する。

「あなたは英語が得意ですか。」という質問に対しては、5段階（「1. 苦手である」、「2. やや苦手である」、「3. どちらとも言えない」、「4. やや得意である」、「5. 得意である」）で回答する形をとった。結果は表1の通りである。「1. 苦手である」「2. やや苦手である」と回答

した学生は62名で、「4. やや得意である」「5. 得意である」は15名であった。「1. 苦手である」「2. やや苦手である」という学生には、そう感じるようになったのはいつ頃であるかを尋ねた。「1. 苦手である」を選んだ者のうち、6名が「小学校」、8名が「中1」と答えている。英語学習のかなり早い段階で「英語は苦手」という意識を持ったことになる。その理由としては、「人前で話すことが嫌いだった上に、日本語ではない言葉で話すから」「先生はわかっている人に合わせて進めた」「文法が分からない」「楽しくない」「単語がすぐに出てこない」「単語が覚えられない」等を挙げていた。語学の習得は楽しいことばかりではなく、困難さもあり地道な努力も必要だが、特に学習の初期の段階では楽しさは不可欠である。最初から英語が苦手と思い込む子どもたちを作らないよう、学生たちの経験をクラスで共有し、小学校でのよりよい外国語活動、英語教育について考える必要がある。

表2は15項目の問いについて、5段階（1：全くそう思わない、2：そう思わない、3：どちらとも言えない、4：そう思う、5：とてもそう思う）で回答した結果である。「英語が好きである」については、英語が好きでない学生と英語が好きな学生の割合がそれぞれ4割程度で、平均が3.09であった。上述の英語が苦手という学生の割合と比べると、数が一致しない。2つの項目についての回答を並べてみると「苦手だけど好き」である学生が12名であった。上述の、小学校から苦手であると答えた6名は、この項目「英語が好きである」について、全員が「全くそう思わない」か「そう思わない」と回答した。小学校から苦手意識を持つと、完全に英語嫌いになることを示している。「外国の人と友達になりたい」については、「4：そう思う」「5：とてもそう思う」を選択した学生が6割で、平均が3.78となった。学生は、積極的に異文化や国際社会に向けて、視野を広げようという姿勢を持っている。これは、将来小学校教員を目指す学生に好ましい傾向である。海外に語学研修やホームステイに行きたいかについては半数以上、海外留学がしたいかについては、半数弱の学生が肯定の回答であった。海外研修や留学についてのアンケート調査は、昨年度中村学園大学で全学的に行っている<sup>[9]</sup>。経済的な理由で困難を感じる学生が多く、今後学生が参加・実現しやすいよう、

[7] 級については5名が未記入であった。

[8] 英語有資格者の特例としては、他にもTOEFL (iBT) 42点以上取得者、TOEFL (PBT) 440点以上取得者が挙げられている。

[9] 「海外研修・留学に関する全学的改革に向けての提言」（中村学園大学 中村学園大学短期大学部、2016（平成28）年3月）

表2 英語や異文化に関する意識

(1:全くそう思わない, 2:そう思わない,  
3:どちらとも言えない, 4:そう思う, 5:とてもそう思う)

設問	M	SD
a. 英語が好きである。	3.09	1.31
b. 映画は邦画より洋画が好きである。	2.82	1.17
c. 映画は吹き替えより日本語字幕で見たい。	3.31	1.27
d. 英語の歌を聴くのが好きである。	3.87	1.04
e. 世界のニュースに興味がある。	3.33	1.10
f. 外国の人と友達になりたい。	3.78	1.12
g. 海外に語学研修やホームステイに行きたい。	3.55	1.22
h. 海外留学がしたい。	3.37	1.28
i. 英語を音読するのが好きである。	2.78	1.14
j. 英語を話すのが好きである。	2.90	1.06
k. 外国の人と話すのが好きである。	3.04	1.13
l. 小・中・高でALTの先生と英語で会話するのが好きだった。	3.07	1.21
m. 学内の「語学カフェ」や「ぐるーぼる広場」を利用してみたい。	2.86	1.11
n. 英語学習において、仲間同士での学び合い（ペアワークやグループワーク）が好きである。	3.47	0.99
o. 人前でパフォーマンス（歌・ダンス・劇・スピーチ等）をするのが好きである。	2.74	1.13

経済的な援助が望まれる。現在大学で実施している4つの海外研修について実施方法等を検討中で、学生の経済的負担を減らせるよう、大学として外部資金を獲得する取り組みを行っている。教育学部の学生には、教員免許の単位取得や教育実習等により、長期の留学は難しい環境にある。少なくとも短期の海外研修等に参加し、異文化体験ができるような支援が必要である。学生たちには、文部科学省等の留学支援プログラムに、積極的に応募するよう呼びかけており、応募し採用される学生も増えてきている。今後も留学の機会を広げるため、指導を継続して行う必要がある。

f～h「外国の友達」「語学研修」「海外留学」の回答に比べて、「i. 英語を音読するのが好き」「j. 英語を話すのが好き」の平均値が低い。後述する、英語の発音に対する自信のなさにつながっていると思われる。「n. 英語学習において、仲間同士での学び合いが好き」の値が高いことは、f～hの回答結果と関連していると考えられる。つまり異文化を受け入れる、外向きの傾向があり、ペア・グループワークを嫌がらない学生が多い。これらは比較的アクティブな学生が多いことを示す結果である<sup>[10]</sup>。以上のような学生の資質から判断して、英語学習において、アクティブ・ラーニングを効果的に使用する

表3 外国語活動に関する意識

	M	SD
外国語活動は児童にとって必要であると思う。	4.04	0.98
外国語活動を担当することに不安はない。	2.41	1.12
外国語活動を担当することが楽しみである。	2.94	1.00

ることが可能である。

Ⅲでは、外国語活動に関する意識として、その必要性や担当するにあたっての不安について尋ねた。結果は表3の通りである。

外国語活動が児童にとって必要であるかについては、肯定的な回答結果であった。外国語活動を担当することに対する不安については、「不安はない」という項目に対して、「1:全くそう思わない」「2:そう思わない」を選択した学生が計51名で約半数が不安と答えた結果、平均2.41となった。不安である理由としては、「自分自身が苦手意識を持っているため」「自分の英語力が不足しているため」と記述していた学生が多かった。特に発音に自信がないこと、ALTとコミュニケーションがうまく取れるかに言及していた学生が、それぞれ5名いた。在学中に少しでも苦手意識を減らすこと、そのためには英語力をあげることが不可欠である。

このアンケートは1年次の前期終了時に行ったものであり、「外国語活動」の授業そのものをどのように進めたら良いかという不安も見られた。不安を感じる学生が多い一方で、「外国語活動を担当することが楽しみ」については、全体としては平均が2.94という結果となったが、「楽しみ」という学生が23名いた。その理由としては、「英語が好きだから」が多く、「子どもたちと楽しく学びたい」、「教材作りが楽しそう」、「自分が楽しかった記憶がある」、などがあつた。前の質問で不安に感じている学生の中にも、楽しみと答えた学生が5名含まれていた。その中には「英語を使う自信はないが英語自体は好きだから」「子どもたちと一緒に楽しみながら英語を学びたい」と答えていた学生もいた。外国語活動を担当することが楽しみという学生は、英語が好きと回答している学生であった。「英語が好き」であることは、学ぶ児童だけでなく、教える教員側にも重要なことである。

次に「外国語活動」を担当する上で、教員に必要と思われる英語の力について尋ねた。「語彙」「発音」「文法」「聞く」「話す」「読む」「書く」の7つの中から、特に必要性が高いと考えられるものを順番に3つ挙げた結果が表4である。予想通り、「5. 話す」が圧倒的に多いが、2番目に必要性が高いと考えているのが「2. 発音」であった。1番必要な英語の力としては「5. 話す」が全

[10] 「o. 人前でパフォーマンスが好き」の平均値は低いように見えるが、これは他大学の学生と比較してみる必要がある。

表4 外国語活動を担当する上で、教員に必要と思われる英語の力

	1番	2番	3番	計
1. 語彙	13	9	17	39
2. 発音	21	24	19	64
3. 文法	5	12	10	27
4. 聞く	9	19	18	46
5. 話す	48	25	13	86
6. 読む	2	8	10	20
7. 書く	1	2	12	15

(回答者99名)

体の約半数、「2. 発音」が全体の2割程度となっている。

さらに上の7つの項目に関連させ、「将来、小学校で外国語活動を担当するために、今の自分に必要だと思いますか」を5段階評価で尋ねた。結果は、表5に示す通りである。「b. 英語の発音練習をする」「e. 英語で会話をする」「a. 英単語を覚える」の順に必要な結果となった。「発音練習」が一番に挙げたことは、外国語活動を担当するにあたって不安と感じる理由に挙げられていた、発音に自信がないことにつながる結果である。名畑目(2014)等でも学生たちが「発音を含む教員のスピーキング力が肝要である」と考える傾向が指摘されており、同様の結果と言える。外国語活動が必修化されるにあたり、担任教師は発音が下手でも、児童の前で一生懸命英語を話す姿を見せればよいと言われてきた。英語を教える準備のできていない小学校教員に対する配慮であったと思われるが、現在も同様の主張をよく目にする。以下は町田(2015: 55)からの抜粋である。

加えて最近では、World Englishes という考え方が広く受け入れられています。これは、アメリカ人やイギリス人が話す英語だけが「英語」ではなく、世界中の人たちが使うようないろいろなアクセントの英語や文化的に多様性のある英語も、コミュニケーションを行う上では立派な「英語」だということです。私はよく研修会で「秋田なまりの英語でも大丈夫ですよ」と先生方に言っています。つまり、英語の発音が苦手だからと尻込みするのではなく、多少なまりのある英語だったとしても、ALT と積極的に英語で話す様子を見せることによって、日本人としてどのように英語を使うのかというロールモデルを示すことができるのです。

担任は英語の発音モデルではなく、英語を使おうとする

表5 将来、小学校で外国語活動を担当するために、今の自分に必要なこと

(1: 全くそう思わない, 2: そう思わない, 3: どちらとも言えない, 4: そう思う, 5: とてもそう思う)

	M	SD
a. 英単語を覚える	4.58	0.64
b. 英語の発音練習をする	4.69	0.58
c. 英文法を学ぶ	4.49	0.72
d. 英語を聞く	4.57	0.69
e. 英語で会話をする	4.61	0.67
f. 英語の文章を読む	4.33	0.80
g. 英語を書く	4.43	0.73
h. 英語の資格試験(英検やTOEIC等)の勉強をする	4.19	1.04

モデルであるという面は確かにある。町田(2015)は、発音に自信のない小学校教員が、担任としての強みを生かして外国語活動に関わるように促しているのだが、小学校教員は通じるレベルの英語を話す努力をする必要があると思われる。自分の発音は下手だと感じている日本人の英語が町田の言う「多少なまりのある英語」と呼べるものなのか。それは英語と呼べないものかもしれない。先日、短期留学から帰国した学生が訪ねてきて、留学中に英語が通じなかった経験を話してくれた。英語で「塩」と言いたくて、「ソルト」と何度か言ってみたが通じなくて困ったとがっかりしていた。日本語には英語由来のカタカナ語が溢れていて、それを利用することができるが、そのままカタカナ発音で言うと伝わらないことがある。おそらくその学生の発した音は[soruto]と聞こえたのではないか。[soruto]と“salt [sɔ:lt]”は違う。日本語と英語の違いに気をつけて、英語らしく発音する努力をすれば、コミュニケーションがスムーズになる。通じる英語の発音についての訓練は必要である。英語らしい発音ができることは、話す自信にもつながるもので、特に音声を聞く活動を重視する小学校の外国語活動においては重要である。小学校教員を目指す学生たちに英語の発音は下手でも構わないという教育をするよりも、英語らしく発音する訓練をするべきである。少しでも発音に自信をつけることが、苦手意識の解消、英語を教えることに対する不安の解消につながり、良い結果をもたらすと思われる。

#### 4. 結び

本稿では、小学校教員を目指している大学1年生100名に対して、早期英語教育に関する意識、これまでの学生自身の英語や外国との関わり、英語や外国語活動に関する意識について行ったアンケート調査をもとに、考察を進めた。

学生たちの海外経験は意外に少ない。小学校外国語活

動において異文化理解は重要である。外国の人と友達になりたい、語学研修・留学をしたい等、異文化に触れる体験をしたいという気持ちを持っているので、実現できるように大学としてサポートする必要がある。英語が苦手と感じている学生が6割もあり、苦手意識の解消は大きな課題である。小学校では英語が教科となることが決まっている。小学校の先生は英語が苦手、発音が下手でも、英語学習者として頑張る姿勢を子どもたちに見せればよいと言われてきた。しかし、学生たちが外国語活動を教えるにあたっての不安は、英語が苦手であることや発音が下手であることからきている。苦手意識の克服が、英語を教える不安を解消する。もちろん外国語活動の指導には、指導法の習得、教材研究等が不可欠であるが、英語らしい発音ができることは、英語を話す自信、そして英語を教える自信につながるものである。

### 参考文献・資料

- 田中真紀子・本多正敏・長田恵理・西尚子（2013）「児童英語教員養成課程履修者の教師認知の考察から得られる指導者養成プログラム改善への示唆」*KATE (Kantou-Koushinetsu Association of Teachers of English) Journal*, vol.27, 85-98.
- 名畑目真吾（2014）「小学校教員を志望する大学生の英語活動に関する意識調査」*JES (Japan English Society) Journal*, vol.14, 131-146.
- ベネッセ教育研究開発センター（2007a）『第1回小学校英語に関する基本調査（教員調査）』
- ベネッセ教育研究開発センター（2007b）『第1回小学校英語に関する基本調査（保護者調査）』
- ベネッセ教育研究開発センター（2011）『第2回小学校英語に関する基本調査（教員調査）』
- 文部科学省（2008）『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』
- 町田智久（2015）「小学校英語授業力ブラッシュアップ 第5回 ティーム・ティーチングを生かそう」『英語教育』vol.64 No.5, 54-55.